

有島武郎全集

第九卷

大正十三年十月廿五日印刷
大正十三年十一月五日發行

(非賣品)

著者 有島武郎

發行人 足助素一
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

印刷人 島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三秀舍
東京市神田區美土代町二丁目一番地

有島武郎全集

第九卷

發行所

叢文閣

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

電話牛込 二五七三番
振替口座東京 四二八八九番

著者肖像

.....

（卷頭）

目次

目次

有島武郎全集 第九卷 目次 終

一八九九年

○

三十二年も早結末に相近き愈々御繁多に被爲入候半と奉恐察候。然處夫にも別に御變不被爲入候て御消光有之候由無上の慶事奉存上候。

先日は御手紙拜受仕候處、木村氏に送物被遊早速御手紙と共に金壹圓贈呈仕候處大に喜び、何れ自身も御禮申述候へ共宜敷申上候様傳言有之候。又小子へも殘金の壹圓御惠與被下毎々の御芳情實に難有奉感佩候。木村氏の親父は同氏の歸れる朝眠れるが如く永逝せられ候由に御座候。

兼て御通知有之候宮島信太郎氏、昨日漸く來札仕候。實は、六日頃發京の由の御手紙有之候爲め、其趣早速海江田氏に報知仕候處、同氏は十三日頃出札し毎日様子聞に被參候へ共、宮島氏の來札差遅れ申候爲め同氏は無據此度の同行斷られ申候。と申すは本月は年末にも際し、同氏が管理せる宮津農場は、如何にしても二十五日頃よ

りはあける事不叶、左候へば到底間に合不申候へばなり。殊に宮島氏の話によれば、同氏も眞狩別に出立十日前當地に於て少々取調べた上ならでは旅行の功殆んどなしと申され候故、山行は本年は成立せざる可きかと存申候。尙明日は海江田氏出札せらる可く候へば、尙其邊の打合せは充分に仕候上御報知申上候。尙宮島氏に御依托相成候金五拾圓は確かに落手御禮仕候。

昨今丁度試験中に有之、明後日を以て結了仕候筈に御座候。歳々年末の感は唯々慚悔のみに有之恐縮の次第に存居候。余は後便に差讓先は要用のみ申上度、草々頓首。

十二月十六日夜（於札幌）

兩親様

武郎拜

○

拜啓三十二年も愈々残少く相成申候處、御多繁の間にも皆々様益々御清適の筈慶賀此事に奉存候。小子亦幸に至て無恙に租年し得申候段乍憚御休神奉願候。當地本年は降雪至て稀少に有之候處、一昨夜より昨夜にかけて非常の降雪有之、加之烈風地を捲き雪を揚げて其猛威當難く、一時往來は全く止み、天地は只風の荒るゝに任申

候。近頃小子は、家の都合にて舊大島氏と共に在りし家に引移居候爲め、壁屋の振動は地震の如く、中々壯快とも云ふ可き光景にて有之候ひしが、今朝に至りて漸く静まり、地上の積雪急に増加仕候て、初て年の暮の如き心地仕候。

先日海江田氏出札せられ、宮島氏と懇談被致候。實地検査の義は來年正月八日以後の事と決定し、猶海江田氏より同地に關する事情委細御話有之、略相方の事情相通申候。宮島氏は其後道廳に出入して、岡地及其附近の地形狀態等取調べ、海江田氏は一先島津農場に歸られ申候。尙同氏には年末の禮として金五圓丈贈置申候左様御了承被下度候。

試験は去る十八日結了仕候。成績は三十五人に對する六番に有之、總平均は八十五點七分に御座候。翌日より冬期休業と相成り申候。小子は此休暇を利用して靜寂なる處に讀書と保養とを仕度、用のなき間丈け幌別か登別の溫泉にて自炊生活仕度存申候。御許可の程奉願候。

山崎老婦人は此度出京被致候へば既に御面會も被爲入候半と存居候。

街上の人は金錢の催促に、返済に、忙はしき間に、机前に靜坐して世事を知らざるかの如く讀書に耽り得る書生の身の上は實に難有至極に有之偏に御高恩の程感體罷在候。

拙書御手許に達候頃は既に年改りて、雑煮の椀の數重なり、霽々たる和氣の間に新年を迎へ給ふ時なるべきかと奉存候。何卒美はしき明治三十三年を迎へ給はん事を奉翹望候。草々頓首。

有島武郎全集 第九卷

十二月二十六日（於札幌）

御兩親様

四

武
郎
拜

一九〇〇年

○

先日は御玉章併に壬生馬行郎の寫眞御惠與に預り奉鳴謝候。

御舉家皆様には益々御清穆に被爲入候由大慶此義に奉存上候。壬生馬行郎共に驚く斗成人致され壬生馬は立派な青年に成られ行郎は甚隆之に似たる様相見目前面會の機を得たる様なる心地仕候。降て小生義其後益々健全に有之、去る五日より七日まで千歳と申候處に修學旅行有之、早朝櫓に乗じて同行者三人と先發し、月寒ツキカシヤと申候處に師團の兵營を見、薪炭を積みたる櫓に出遇ふ事幾回と云ふ數を知らざるに、毎日かく多く都會に出し都會はこれが必要しつゝあるかを見て其消費力に大に驚き、島松に中食し三時半頃千歳に着仕候。中途櫓を轉覆せしめらるる事合せて四度、小生は先地に於て食すべき大菓子箱を預り居候爲め是を抱へて雪中に半身を埋め其都度大笑仕候。道の嶮惡これにて御推察可被遊候。但し平滑鏡の如き雪道を馬櫓に乗じて長驅するの快は經驗なき人の

一九〇〇年

到底解する所にあらずと存申候。千歳は落々たる小僻村に不過候得共往昔は室蘭札幌の通路にも當り隨分繁華を極め候由。主上も嘗て御通輦ありし處に御座候得共汽車開通以來全く衰頹し立派なる旅籠屋の見る影もなく荒れたるは昔を忍ぶに餘あり候。久振にて人間に遠く自然に近き幽地に來候事なれば實に心胸の豁如たるを禁する能はず明日の壯遊を胸に畫き申候。此夜同窓四人嬉邊に相集り他者熟睡の後まで快談し一時に至りて就寢仕候。

五日に相成候。不幸にして天曇り折々降雪有之候ひしも早起して結束しつゝ出立致候。蓋し目的地なる孵化場は當村を横流せる千歳川の上流二里の處に有之候。此道中甚だ幽邃にして殆ど太古の如く林樹を穿ちて河邊に出で河邊を去りて林樹に入り委蛇たる一道の小徑は小子等を屢々名狀すべからざる閑寂古雅の清境に誘申候。折々人家ありと見れば是皆アイヌの住む者に有之、勇悍なるアイヌ犬は異装の小子等に吠ゆる事頻りに御座候。正直にして朴敬、勇猛にして多情なるアイヌの遺民が長髯を振ふて山中の「自然」と勇ましき戰鬪を爲し、酷薄なるシヤモ（彼等が日本人を指して云ふ語）の蛇の如き毒手を避け居る有様は轉た愁痛にして清新なる一篇の詩に御座候。小子は例の自然癖に不堪獨り後れて呻吟しつゝ心中無限の慰藉を得て孵化場に着仕候。

人工を以て鮭の卵を産ましめ適當の裝置を以て之れを孵化し他魚の襲撃に堪ゆるに至りて之れを放ち海に下らしむる者之れ人工孵化大體の組織に有之、近來當道には處處設置せらるゝに至申候。當場に於ては年々二十萬粒餘の卵を孵化仕候由、赤色の美しき卵に眼の生じたるものを破りて魚體の現はれたるもの等種々有之、中々の奇觀に有之候。此の説明を聞き採集を終りたる後再び前路を経て歸り此夜も千歳に一泊翌日歩行して歸札仕候。

品川氏に次ぎて外山氏の死去あり共に一方の才能ある人を失候事惜怨の次第に御座候。

ボアーも追々風向不宜候由氣の毒至極の次第に御座候。長き物には卷かれるとは云ひながら何卒正義に由て立ちしトランスバールの面目を宣揚したき限に御座候。ヒリツピンも哀れる状態の由、世の中は強慾なる強力者の勝手氣儘の如く見え申候。然し正義に依るものは最後の勝利者たる可きを信じ彼等の上に祝福の加へられん事を祈居申候。

當月分學費冬の事とて薪代其他防寒の用意に平常よりは相掛り申候得共不足なく居申候間御配慮被下間敷願上候。但し小子儀袴非常に相損じ風通し大分澤山相出來申候間乍御面倒御新調なし被下度、丈けは二尺三寸許、柄は可成よごれの目立たざる黒色せる者に願上度甚恐入候得共宜敷奉願候。

尙御序の節左の書物丸善にて（中西屋にても可有之や）御買上げの上御送付願上候。（中略）尙眞狩別之儀宮島氏に於て未だ少々調付兼候様子に有之候得共今兩三日御待被下度爾あらば兎角の御返事申上らる可く候。

乍末筆不順の候折角御自愛奉祈候。早々頓首。

三月十四日（於札幌）

武 郎 拜

御 兩 親 様

尚去る四日にはわざ／＼小子の誕生御祝被下候由唯々感謝の外無之候。小生は自らこれを全く忘却し居り

一九〇〇年

同月同日生れる森本と談話の際二人思ひ出し二人ながら大笑仕候。互に口上に祝し合ひたるのみ、赤飯もなく菓子もなく氣樂なる事に有之候。

○

拜啓春暖の候に相成申候處御舉堂皆々様益々御清祥の段大慶此事に奉存上候。

次に小子亦幸に至て元氣既に去る二十三日の體格検査に於ては

身長 五尺三寸二分 體重 十四貫八百目

胸圍

常時二尺八寸三分

盈虛の差略二寸

の成績を得、強健と注せられ申候。此頃に當地も氣候極めて宜敷相成申候間、朝は五時より五時半に起き夜は十一時頃に寝ね、コツ／＼やり居申候へ共一向疲勞も感ぜず實に之れは小子一生の幸福と存じ、併せて幼時の衰弱と度々の御丹精とを思ひ實に感謝の念に堪不申候。

大重氏逝去の事實は或新聞にて一寸見候様覺候も、多分人違なるべく、よもや大重氏には非ざる可しと存居候ひしに果して同氏にて有之候事唯驚愕の外無之、壯健に見えたる人も如露の命果敢なきものと存申候。短きもの

は人の命、人の命より長くして而かも至つて短きものは名譽高名、唯々人が其能を盡してなしたる仕事は、小石一つ動かしたるにさへ無限の生命あるを思ひ、小子同室の河野氏が飼へる小鳥の籠の中に閉こめられたるものに歌一首與へ申候。

よしや世は汝につらくも

つらき世を歌ひ清めよ其細き音に

御笑覽被下度候

河野氏の件に付き母堂態々參邸有之候由乍例御熱心實に感入候。同氏も未だ十九歳なる弱年と申し殊には生來體格至て不健の方にて、唯諸種の體育によりて僅に健全を得居る次第に御座候へば、此運動の好時期には却て適宜の體育を爲す方可なりと存じ深く勉學を忠告不仕候。然し氏は所謂江戸子の質にて、熱したる所には萬腔の力を注ぐ方故、今は遊びに殆ど寸暇なき有様に御座候。時々は不及乍ら出來得る丈けの忠告を爲し又自ら其先導とならん事を勉可申候。

最早櫻も散り果て候様子御庭前の佳香ある花も泥土に委し候か、當地も昨今は漸く春めきて嫩芽は未催さず候へ共、花曇りとも云ふ可き空に時々靡々たる細雨さへ致申候。今夜も蕭々たる雨の音靜かに机邊に聞居申候。

皆々様の御高詠澤山御漏し被下實に難有、身其境にある心地仕候、小子も負けぬ氣となりて腰折一首梅櫻散りしく中にうれしくも

心の花の盛り久しき

眞狩別の件如何御運相成候や乍陰御案申上候。證明書漸く下附相成申候間同封御送付申上候御落手奉願候。
先は御返事旁右申上度草々。

四月二十七日夜（於札幌）

母上様膝下

武郎拜

○

拜啓御玉章拜誦仕候處御舉家皆々様益々御健勝に被爲入候段奉賀候。壬生馬の病氣も左程には無之様子に承知は仕候へ共、何分病症不善の處に存ぜられ候。何卒充分保養仕候様御傳聲願上奉候

土地の義確かに拜承仕候。早速坂本様へ御傳言可申上參上仕候處、折悪敷上川地方へ御出張被致候由に付其儘歸宅仕候。小生等も水産學研究の爲め明日より三日間全級余市地方に修學旅行有之候爲、暫時不在と相成候間、若し其間に坂本様御歸宅もやと存じ御仰の趣相認め同氏宛に差殘申置候。期日も愈々切迫仕候事に御座候へば何分速かに御措置の程御便利と存上奉候。拓殖銀行等も随分繁忙の様子に有之候へば、土地に對する熱度は當道に